

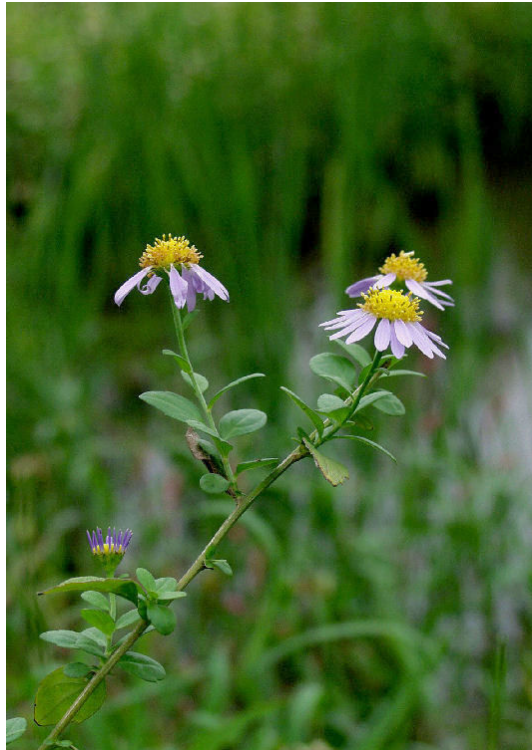
ビオトープの花

カントウヨメナ

秋の野山を彩る花の一つが野菊です。柏市で見られる野菊には、ノコンギク、ユウガギク、そしてカントウヨメナがあります。カントウヨメナは湿り気のある場所が好きで、水田の近くでよく見かけます。ビオトープでは水田の畦道で咲いています。「田んぼによく似合う野菊」、それがカントウヨメナです。花卉にはうっすらと紫がかった紅をさし、優雅で落ち着いたたたずまい、心引かれるものがあります。

ビオトープで最も美しい花の一つです。名前は、「関東地方に咲く嫁菜」の意です。嫁という言葉の意味は、優しく美しいことからきたという説もありますが、よく分かっていません。菜という言葉は、昔から若菜摘みの草として有名だったことからきています。

(佐々木光正)



今年のホタル発生状況

3月20日にホタルの幼虫を回生の里寄りの芝生広場下の水路に放流しました。その成果はどうかと大いに期待しました。この水路にヨシが密生し、この状態ではホタルは飛翔できないだろうと、この水路のヨシを刈り取ってもらいました。

6月中旬ぐらいから、時々、夜になるとは見に行っていましたが、多数の目で見れば発見できるかもしれないという期待で、夜、集まれる会員でホタルチェックをしようということで、呼びかけました。7月7日、7月13日、7月22日と、ホタル飛翔のもっとも期待できる20時を中心に、毎回5～6人の参加で放流地域と、おまけで名戸ヶ谷病院横の水路とを観察しました。

結果は、7月7日に1匹だけ光っているのを確認しました。飛翔はせず、ヨシの葉にとまっていた状態です。残念ながら、今年の確認はこの1匹だけでした。しかし、とにかくゼロではなかったということで、来年以降に望みをつなぐものとなりました。

なお、名戸ヶ谷病院横の水路はピークで10匹ぐらいの飛翔が見られ、この地域で、中原と併せてホタルが生存しているのは力強い思いです。

(高田昭治)

編集後記

今号は3ヶ月毎の発行というスケジュールから言うと、9月始めの発行ということでしたが、稲作特集ということで、稲刈りまでは入れようということで、原稿締め切りを9月15日として、9月の中旬以降のなるべく早い時期の発行を目指しました。

原稿や、写真は締め切り前にほぼ集まり、残りは編集子の作業だけでしたが、またも9月上旬に中国西北部の旅行が入り、延び延びになってしまったことをお詫びします。

執筆が幹事に偏っているとは自覚していますので、皆さまの声を反映するように、今後も努力していきたいと念じています。

(高田昭治)

注：記事の中で、文と写真が別人の場合は、それぞれ、文、写真と表記しました。

名戸ヶ谷ビオトープだより

第43号

2010年秋号

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/index.html>

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

稲刈特集号

小雨の中での名戸ヶ谷小生徒による稲刈り

9月8日(水) 8時30分から10時にかけて恒例の名戸ヶ谷小 5年生60名による稲刈りが小雨の中で行われました。9月9日13時20分からの予定でしたが台風9号による降雨の予報があり、8日の同時時間帯に繰り上げられました。当日朝になって雨の降り出す時間のはやまるとの予報があり、急遽午前8時30分に再繰り上げて行われることになりました。



小雨なので、刈り取り現場では束ねず、ともかく刈り取って学校へ運ぶ



小雨が降りだす中先生に引率された生徒達が元気な声とともに近づき、名戸ヶ谷小5年生が稲刈りのできるような服装で来場し、挨拶と簡単な注意説明の後直ちに4グループに分かれて引率の先生と会員の皆さんの指導に従って、もち種1、2、3、4番田んぼに入り、稲刈りを始めました。

今年も刈りにくい畦沿いの稲株や倒伏のひどい4番田んぼの約半分ほどは事前に会員の皆さんによって刈って、ハザ掛けされてありました。

今年は本降りになる前に終わろうとして、刈った稲を束ねずにコンテナバックに直接詰め込み、ワゴン車に積み込み、先生が学校の講堂まで運び、そこで6年生が束ねて、干し場に掛ける手順で行われ、刈った稲を束ねる面倒な作業をしなかったため田んぼでの稲刈り作業は順調に進み、10時前には終わりました。

今年の田んぼは稲刈り前の水落とし・干上げが十分に進んでいたもので、足が余り深く田に沈まなくなっており、生徒達

も稲刈り作業中の転倒や尻餅もなく、楽しい稲刈りの体験をされたようでした。

今年も校長先生、教頭先生、3名の引率先生達の適切な指導、その他10名ほどのPTA役員のお母さん達と柏市役所の環境保全課員1名の見守る中で稲刈り作業は無事に終わりました。

しかし今年は日照りが続いたため、Bゾーンの足洗い場が完全に干上がっており、又地下水位が低下したためか足洗用手押しポンプからも水が汲みあげられなかったもので、生徒達は田んぼから出て足も洗えずに泥で汚れたまま学校に帰ることになったのは少し可哀想であった。

(影山賢三・文 佐々木光正・写真)

異常気象との闘いだった今年の稲作

今年の夏の異常気象は、ビオトープの作業にも大きな影響が出ました。

雀ネット掛け、外し作業は、幹事会前の涼しい時間に予定しましたが、熱帯夜が続いて涼しくありません。多くの会員の参加で何とか作業ができましたが、暑さには勝てません。稲掛けの見本棚作りも2時間ほどの作業で頭がボーとしてきます。最後は会員の人員パワーで昨年と同じ形に完成しました。

稲刈りも同様です。猛暑になる前の8時頃から作業がはじまりましたが、初日15人、2日目10人の参加でも終了しません。平日の作業協力で9月半ばでやっと終了しました。1ヶ月間も雨が降らない為、田んぼの中、畦の草の成長が早く、草を避けながらの稲刈りとなり、更にはかどりませんでした。台風の影響や、倒伏での籾からの発芽はありませんが、株脇から新芽が出ています。田んぼも乾き気味で、例年のような「泥んこ稲刈り」にはなりませんでした。何か違っていました。こんな稲刈りは初めてです。米粒の大きさが若干小さく感じられますが、稲掛け長さは昨年同等以上です。昨年同様の収穫量が期待されます。本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。（小笠原智・文 佐々木光正・写真）



猛暑の中の作業が続いた今年の稲作

左上 会員による稲刈り 9月12日
左下 同上

右上 雀よけのネットかけ作業 8月7日

右下 刈り取った稲束をホダカケ 9月12日

ビオトープとわたし 小笠原 智

柏に住んで30年弱になりますが、田んぼや川のある里山の中で育ったので、自然が大好きです。柏の広報に載った「名戸ヶ谷ビオトープ会員募集」で市役所に行ったのが関わりの始まりです。初めは、前会員の増田さんの指導での稲作りでしたがいつの間にか、稲作りや木道作りに嵌ってしまいました。

ラムサール条約にも登録されている宮城県北部の燕栗沼近くで育ちました。当時は沼の一部が開墾されていて、我が家でも沼内の田んぼで米を作っていました。

稲作りは、苗代で種を蒔き、苗を育てて田んぼまで馬車で運び、近所の人達と共同での田植え。その前に堆肥の散布や馬での田起こし・代掻きをしますが、その時の「馬の鼻取り」（馬のたづなを引き、先導する仕事）が記憶にある最初の手伝いだったような気がします。ビオトープで行っている田の草取りや、畦の草刈りは親の仕事でした。稲刈りも共同作業、刈った稲を畦に立てた杭に掛けて自然乾燥、乾いたら又馬車で家の倉庫に運び、雪が舞う頃まで脱穀作業をしていました。最後に籾擦りをして玄米を俵に詰めて農協に運びました。冬は作業場で親が藁で縄や俵を編んでいたのを見ていました。米作りは一年がかりの仕事でした。一番の思い出は、馬車に稲や干草を高く積み上げて家路に向かう時、上に寝転んで夕焼けの中を赤とんぼやカラスがねぐらに帰の様子を見ながらうとうとしていたことです。

農作業は、農耕馬から耕運機、そしてトラクターや稲刈機、田植え機へと多くの作業が機械化されました。子供の頃に手伝わされた農作業経験がビオトープで生かせるとは、想像もつきませんでした。

子供たちと作業をしていて、少しでもお米を作る作業の経験と収穫の喜び、共同作業の大切さなどが記憶の奥に残ってくれればと思います。

無農薬かつ、有機肥料で稲作りをすることで、魚や貝、鳥や蛇や虫などが自然の姿で活動しています。この様子を子供も大人も感じてほしい。「名戸ヶ谷ビオトープ」を長く保全し、住民や「回生の里」の人達などが昔の田んぼを思い出し、のんびりと散歩できる空間をと思い、これからも活動を続けていきます。私のストレス解消の場所、趣味の職場でもあるので時間がある限り、毎週末に顔を出しています。



ラム

手賀沼ビオトープ

手賀沼ビオトープというのは、手賀沼の北岸、我孫子市岡発戸（おかぼつと）新田地域に人工的に作られたビオトープです。

このビオトープは千葉県が施工し、我孫子市が事務局となっており、有識者、市民団体代表者などからなるエコアップ懇談会という組織が管理するという事で運営されています。このビオトープの一部は「手作りゾーン」という田んぼ10枚からなるゾーンとなっており、稲作、生きもの飼育の実験などの目的で活動を希望する市民団体に貸与されています。

筆者は、このビオトープの田んぼ1枚を借り受けて、手賀沼の浄化と結びつける目的で、沈水植物の生育実験を行っていますが、成り立ち、水・泥の状態などなど、いろいろの点で名戸ヶ谷ビオトープとは異なる点が多々あり、機会を見て紹介したいと考えています。（高田昭治）

作業日誌から 6.19, 7.17, 9.5

6.19 水田草取り、Bゾーンヨシ刈リ



7.17 旧ホテルゾーンの草刈リ、Bゾーンのミント除去、周辺の草刈リ



9.5 稲掛けパイプ組立て ネット張り



今年のビオトープ稲作の作柄概況

今年のビオトープ稲作の作柄状況を稲刈りまでの経過に基づいて概観して見ることにする。今後脱穀、粃摺り、精米、収穫祭での試食等結果をも追加して、今年の稲作の総括をしたいと思っている。

今年の苗はこれまでの佐原市で育苗した不耕起苗に替えて柏市で育苗した苗を初めて採用した。

今年の稲作の作柄は概して昨年よりやや良である。この作柄に影響したと思われる事項について以下私見を述べて見る。

- 1、不耕起苗を一般慣行苗に替えた件について、その影響は少ないように見受けられた。
- 2、6月中旬にうるち水田の水面がアオミドロで覆われた。特に5、6番及び2番下流域のように水の滞留しがちな地区が顕著であった。一部人手排除した。下旬になると自然消失したが、分けつ時期であり、分けつ抑制の影響が心配されたが、稲刈りの段階ではその影響は少ないようであった。



3、もち水田1番への給水路に貯水池を作り、給水の水温を高めた。
1番田んぼの給水口付近に生育が数日遅れた状態が見られたが、昨年のような顕著な生育遅れは見られず、貯水池の効果を確認できた。来年は池を更に広げて見たい。

- 4、今年は7月下旬の梅雨明け後猛暑が続き、結実期の日照量は十分であったが、熱帯夜が続いたので、米の食味を落とすとされている白濁米の混じる高温障害の被害が心配である。

5、今年も熟成有機肥料を昨年と同量施肥した。今年は元肥を多く、穂肥を少なくしたが、その影響は稲刈りまででは認められなかった。

- 6、雑草の影響では、今年は6月に入ると「コナギ」が見られたが、会員のこまめな草取りで、その被害は少なかった。

しかしうるち水田で旧切り株にアメリカセンダン草、3、4番水田の「オモダカ」5番水田の駐車場側に「ヒエ」が目立った。

- 7、うるち水田は地面の凹凸がひどく、根付き遅れ苗の分けつが少なく、全体に分けつ数不均一であった。特に今年の苗は背丈が短く、その影響が大きいようであった。田植え前の地均し、雑草取り等を丁寧にする必要がある。

8、今年は落水時期を早めたので、倒伏稲が少なく、芽のでた粃は見られなかった。又稲刈りに時に足が深く沈まないの、作業性は改善された。しかし粃の結実度や高温障害への影響が心配である。



名戸ヶ谷ビオトープ春の生態調査（動物類）

6月7日（月）に柄澤氏に講師をお願いし、恒例の春の生態調査を行いました。晴天の中、多くの生きものたちと出会うことができましたが、今回はいくつか新しい顔ぶれにも出会うことができました。名戸ヶ谷ビオトープの生態系の豊かさを再発見することができました。

確認した生きものは以下の通りです。

＜鳥類＞

ツバメ / スズメ / ヒヨドリ / ムクドリ / セグロセキレイ / オオヨシキリ / クイナ

＜クモ類＞

アリグモ / ナガコガネグモ / イオウイロハシリグモ / ササグモ

＜昆虫類＞

ナミテントウ / ナナホシテントウ / ハスジカツオゾウムシ / クロウリハムシ / ヒメカメノコテントウ / ホソヘリカメムシ / マエキアワフキ / カマキリ（幼虫） / ツチイナゴ / ヒシバツタ / ヒメギス / クビキリギス / ショウリョウバッタ / シオカラトンボ / オオアオイトトンボ / オニヤンマ（幼虫） / クロスジギンヤンマ / ナミアゲハ / モンシロチョウ / ヒメジャノメ / ヤマトシジミ / ツマグロヒョウモン / スゲドクガ（幼虫） / ブドウスカシクロバ / ホソヒラタアブ / マダラガガンボ / フタモンアシナガバチ

＜爬虫類・両生類＞

ニホンアマガエル / ニホンアカガエル / ウシガエル（鳴き声） / ニホンカナヘビ / クサガメ / アオダイショウ

＜魚類＞

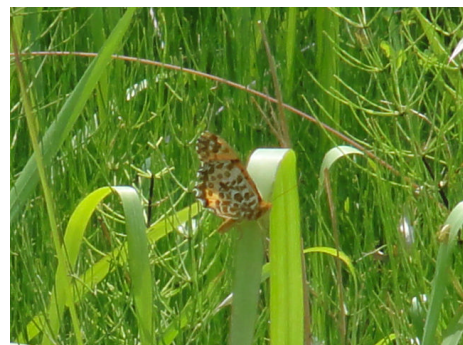
ギンブナ / カダヤシ / モツゴ / ツチフキ / タイリクバラタナゴ / ドジョウ

＜その他水生生物＞

スジエビ / アメリカザリガニ / サカマキガイ



セグロセキレイ



ツマグロヒョウモン

特にクイナは、調査の日に確認したものではありませんが、大変珍しい鳥で篠崎会長が写真に収め、同定されたもので、一覧に入れさせていただきました。その他にはクロスジギンヤンマは非常に美しい色彩のヤンマで、これまでも目撃報告はありましたが、調査で記録されたのは初めてかと思います。魚類のツチフキも今回初めて記録されました。ツチフキは本来近畿以西に分布する魚ですが、関東にも移植されたものが分布します。どういう経緯でビオトープに来たかはわかりませんが、何度か観察されているので定着しているものと思われます。



クロスジギンヤンマ



ブドウスカシクロバ



ツチフキ



ギンブナ

（松清智洋）

名戸ヶ谷ビオトープと「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」の誕生まで

名戸ヶ谷ビオトープは、平成13年3月柏市が策定した「柏みず環境プランⅡ」の中で、3件のリーディングプロジェクトのひとつとして計画されたものです。リーディングプロジェクトは、「望ましい水環境」（健全な水環境で豊かな地域環境を形成し、人と自然の共生をはぐくむ）を実現するための先導的に推進するプロジェクトです。このプロジェクトによる名戸ヶ谷ビオトープのポイントは次の3件です。

1. 湧水による水田生態の復元と水田の活用
2. 湿地系植物によるビオトープの形成と、水辺の生きもの誘導
3. 市民活動と環境管理

その後、名戸ヶ谷ビオトープの整備計画を、計画立案するための検討会が平成13年2月設けられました。構成員は学識経験者5名、市民6名で構成されています。その後精力的に検討が行われ、平成13年9月には整備計画の概要が決まりました。その内容は次のとおりです。

- Aゾーン 1.農薬や構造改善が進む前の水田形態を、できるだけ復元する。
2.水管理は湧水を活用し、極力従前の方法を踏襲する。
3.見学者用としてデッキを活用する。
- Bゾーン 1.名戸ヶ谷の水田における湿地系植物のビオトープを形成する。
2.当地にあった植物を基本とし、その環境で生物（トンボ等）の生息を誘導する。
3.北側は水深を5～10cmとし、適合する植物の生育を期待する。
4.南側は水深を25～45cmとし、適合する植物の生育を期待する。

この計画に基づき、翌10月から工事に着工しました。一方、ビオトープの運営については、平成14年5月に「名戸ヶ谷ビオトープ活用運営委員会」が設けられました。構成員は、学識経験者3名、隣接町会長2名、小学校3校代表3名、市民4名で構成されています。毎月委員会が開催され、10月には最終報告書が提出されています。この報告書でビオトープの管理は、市民参加による管理、活用の組織をつくることが明記され、現在の「名戸ヶ谷ビオトープを育てる会」が、平成15年1月発足いたしました。（篠崎 将）



2003(平成15)年1月当時のBゾーン



2003(平成15)年3月当時のビオトープ